

僕は君と幽美に微笑み
たい。～だから今日も、
僕は半径1メートルの世
界で君と向かい合う～

リュオン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——君と僕は、半径1メートルの世界で生きている。

とある中学校には、こんな噂が存在する。

——東校舎二階、その教室の1つの窓際の、とある机——

その机に関わった者は、呪われる——と。

その机には、*“透き通った女性の地縛霊”* がいると言う。

—————そんな彼女を、僕は見ている。

半径1メートルのその空間に居る君は、きっと笑うととても美しいのだろう。勿論、今でも十分美しいけど。

僕は、君と笑いたい。それが、*“1つの存在に恋をした人間”* の、錠だから。

—————だから僕は、今日も君と向かい合う。

—————孤独で美しい君の、投げ所の1つになれる様に。



はい、まあいつも通り新シリーズです。

だがしかし今回はいつもとは違うーいつもは新しいネタ思いついて我慢出来ずに更新し始めて、結果前シリーズが更新停止するのがテンプレだったが！

：いやまあ、今回もテンプレになぞらえてるんだけどね……ただ、一応今回、かなり短いシリーズになります。

まあ既にオチまで考えてるからね、毎日投稿したら1週間ぐらいで終わると思うので、現在更新中のシリーズの更新が止まる事は、多分無いです。多分。

因みに、ラブコメよりは純愛寄りになります。ヒロインは萌え的な可愛さが出る様子指しますが、オチとかその他諸々はラブコメじゃ無いです。悪しからず。

最後に、ブクマや評価、感想レビューなどいただけると、ほんつとに励みになります！ちよつとした人助けだと思って、ポチっていただけると幸いです！

なお、こちらの作品は小説家になろう様にも投稿しています。

では。

目次

第1話 向かい合って笑いたい | 1

第1話 向かい合つて笑いたい

——僕の所属するクラスには、とある机が存在する。

——その机は、クラスメイト、いや、学園の生徒全てと言つても過言では無いだろう人々が、こう呼んでいる。

——呪いの机、と——

その机には、とある一人の女性が、いつも肘をついて座っている。

授業中、休み時間、放課後。

そんな学校生活の全ての時間を、彼女は肘をついて、窓の外をぼんやりと眺め

る——そんな行為に費やしている。

彼女は、美しい。

何処か吹雪を思わせる、腰の辺りまで伸びた真つ白な透き通った髪。

すべすべとした、見る者に陶器をイメージさせる、綺麗な透き通った肌。

座っている状態からでもゆうに分かる、調和の取れた、その場所に存在するだけで空間に馴染みつつ、果てし無い存在感を発する透き通った身体。

白と黒、その2つが反発しつつも共存し合う、ガラスの様な透き通った瞳。

そして、聞いた者に流水を考えさせる、流れる様な透き通った声。

全てに置いて完璧と言つても良い程の容姿を持った彼女は、だがそれでも、僕以外の人の眼を惹く事無く、そこに存在する。

何故なのか、一ヶ月程前に中学二年生に昇級し、新たなクラスでの生活をスタートさせた僕は、直ぐにそう考えた。

即ち、何故これ程までに美しく——人の心臓の鼓動を速める程の魅力を持った彼女

が、何故誰とも関わる事無く一日を過ごして居るのか。

その答も、また直ぐにやって来た。

————俗に、僕の所属する学園には、“関わってはいけない領域”がある。

————俗に、“学校の七不思議”と呼ばれるソレは、関わった者に不幸と呪いを与えると。

————その内6つ、ソレは、僕も知っていた。

云く、西校舎3階の女子トイレ、その奥から三番目の個室を三回ノックする事で現れる、おかつぱの少女の噂。

云く、音楽室に飾られた絵画の一枚、ベートーヴェンの瞳が、こちらを見つめると言う噂。

云く、云く、云く――

ソレらの人の業によって生まれた“噂”は、人の口から耳、そして口から伝わって行く。

――いつしか、ソレらの“云く”は、僕の耳にも入ってくる。

――だが、僕の耳に入ってきたのは6つだ。つまり、“1つ足りない”

――その、最後の1つ。数少ない僕の友人に聞いた所、どうやら知らない僕の方が異常だった様だ。

――その、“見られない彼女”

—————彼女もまた、触れてはならない。七不思議の1つ。

—————『呪いの机に向かう、透き通った地縛霊』の噂。

—————誰にも見られる事無く、人に何ら害を成す事無く、だがその存在を怪しまれ、また不気味がられる不憫な存在—————ソレが、彼女と言う人間の正体だ。

—————僕は、その存在に恋をした。

いつも誰とも馴れ合う事無く、ただ自身のペースを貫く少女に。

誰からも誰よりも不気味がられ、だがそれを気にする事無くただそこに居る彼女に。

自身の存在出来るテリトリー、*“呪いの机に向かう、半径1メートルのその空間で、誰よりも孤独に、誰よりも美しく存在する”*、そんな *“幽霊”* に。

——だから僕は、今日も彼女に微笑みかける。

孤独な彼女の、1つの拠り所に、なれる様に。

未だ一度足りとも見た事の無い、だが明確に想像出来る、きつと美しいのであろう微笑みを、一度と言わずこの目に焼き付ける為に。

——だから僕は、今日も半径1メートルのこの空間で、彼女に話しかける。

「おはよ、優美（ゆみ）さん」

「あなたは、何故いつも私に話しかけてくるのですか。」

「未だ相容れられない、一ヶ月の君と僕の関係。」